

『法華玄贊』のチベット語訳の特徴

望月海慧

(身延山大学)

국문요약

티벳 대장경 텐구르의 「경소부經疏部」에는 한문에서 티벳어로 번역된 텍스트로서, 원측(613~696)에 의한 『해심밀경소解深密經疏』와 기비(632~682)에 의한 『묘법연화주妙法蓮華註』가 수록되어 있다. 전자는 신라 출신의 법상종 학승에 의한 『해심밀경』의 해설서로, 같은 법상종인 후자 자은학과와는 견해의 차이가 있었다고도 전해진다. 본고에서는 후자 『묘법연화주』를 한문 텍스트인 『묘법연화경현찬妙法蓮華經玄贊』과 대비하여 해독한 결과에 대해서 약간의 고찰을 시도해 보았다.

『묘법연화주』는 한문 텍스트인 『묘법연화경현찬』과 내용이 완전히 일치하는 것이 아니라, 「견보탑품」의 도중에서 갑자기 끝나고 있으며, 번역도 초역으로 간주된다. 그러나 그 내용을 검토해 보면, 번역이 생략된 곳에는 생략될

만한 이유가 있었음을 알 수 있다. 그 원인을 정리하면, (1)『법화경』의 한역과 장역藏譯의 장章의 차이(「제바품」 「촉루품」 등), (2)의거하는 『법화경』 한역과 장역의 차이(계송의 수, 결락 등), (3)티벳에 전해지지 않은 문헌(『대지도론』 『십이문론』 『십주비바사론』 등), (4)한어에 의한 어휘 해석, (5)중국 의 독자적인 정보(『법화경』의 전파, 비불교문헌) 등이다.

티벳어 역자는 『법화경』에 관해서는 한문에 인용되는 구마라집역 『묘법연화경』에 의거하지 않고, 같은 경의 티벳어역에 의거하고 있다. 위의 원인들 중 몇 가지는 그로부터 파생한 것이다. 또한 인용경론에 관해서는 확인되지 않은 것 뿐 아니라 확인할 수 있는 것에 대해서도 번역을 생략하는 경향이 있다. 이는 확인되지 않은 전적의 존재가 원인이 되어 전거의 확인을 피하게 되면서, 인용경론의 번역이 생략되었을 가능성도 있다. 이와 같은 이유로 티벳어역은 한문의 원본보다도 훨씬 짧은 텍스트가 된 것이다.

또한 티벳어 역자는 『법화경』의 한역과 티벳어역의 차이를 인식하고 있었고, 그래서 한문을 직접 번역하지 않고 『법화경』의 티벳어역을 보면서 번역하고 있음도 확인할 수 있다. 그리하여 한문의 문제점을 경전의 티벳어역에 의거하여 수정하고 있다는 것도 확인된다. 그러는 가운데 수정할 수 없는 점이 상기의 문제점으로 발생하게 된 것이다.

주제어: 기基, 『법화현찬』, 『묘법연화주』, *Dam pa'i chos puṇḍa rī ka'i 'grel pa*, 한어 문헌의 장역

はじめに

チベット大蔵經のテンギュルの『經疏部』には、漢文からチベット語に翻訳されたテキストとして、圓測(613-696)による『解深密經疏¹⁾』と基(632-682)による『妙法蓮華註²⁾』が収録されている³⁾。前者は新羅出身の法相宗の学僧による『解深密經』の解説書であり、同じ法相宗の後者の慈恩学派との間に見解の相違があったことも伝えられている。これらの法相宗関連の文献だけが何故にチベット語に翻訳されたのか⁴⁾、また、どこでなされたのか⁵⁾、などの翻訳の経緯も含めて検討すべき課題で

- 1) テキストは、漢文の『解深密經疏』とそのチベット語訳『聖解深密經疏('Phags pa dGongs pa zab mo nges par 'grel pa'i mdo'i rgya cher 'grel pa)』(Tib. D. No. 4017, Ti 1-291a7, Thi 1-272a7, Di 1-175a7, P. No. 5517, Ti 1-336a8, Thi 1-322a8, Di 1-198a5)となる。漢文とそのチベット語訳を比較した研究については、稲葉1944, 1976; 野沢1951; Jang 2013がある。Cf. 橘川2001, 7-8.
- 2) テキストは、漢文の大慈恩寺沙門基撰『妙法蓮華經玄賛』(Chin. T. No. 1723 = T)とそのチベット語訳『妙法蓮華註(Dam pa'i chos punḍa rī ka'i 'grel pa. A. Sa'i rtsa lag)』(Tib. D. No. 4017, Di 175b1-302a7, P. No. 5518, Di 198a6-347a8)となる。本稿では、中華大蔵經 (=B), Vol. 69, 476-826)所収のテキストを用いた。
- 3) その他にも、『デンカルマ目録』では、「經の広注で漢文から翻訳されたもの」として8種の文献に言及している。Hermann-Pfandt 2008, 321-324, [565]-[572]。また、カンギュルにも漢文からチベット語訳が複数収録されていることが明らかになっており、これらについては現在ジョナサン・シルク教授により研究がなされている。
- 4) 中国仏教における法相宗のコンテキストで考えると、圓測と基のテキストがチベット語訳されていることは興味深いが、チベットにおいて両者の間の見解の相違が認識されていたのかは不明である。その一方で、ツォンカバ・ロサンタクパが前者を引用して、真諦、玄奘などに言及していることも報告されている(ツルティム、小谷1986, 108)。このことは、もちろんこれらの文献がチベット語に翻訳されていたことにより彼が知り得た情報である。
- 5) 法成(Chos grub)による前者のチベット語訳が漢文テキストを忠実に訳していることに対して、後者のチベット語訳は文意を取っての翻訳になっている。その翻訳スタイルの相違は、翻訳された場所の相違を意味するのかもしれない。すなわち、後者では中国オリジナルの情報の翻訳を欠く傾向にあり、そのことは中国仏教の情報を得にくい地理的環境に翻訳者がいた

ある。しかしながら、これについては筆者の及ぶべき課題ではないので、本稿ではそのための資料提示を目的として、後者の『妙法蓮華註』を漢文テキストである『妙法蓮華經玄贊』と対比して解読した結果について若干の考察を試みる。

『妙法蓮華註』は、漢文テキストの『妙法蓮華經玄贊』と内容が全く一致しているわけではなく⁶⁾、「見宝塔品」の途中で突然に終わっており、その翻訳も抄訳とされている。そのために、これまでにテキストの同一性やその著者について議論もなされてきたが、その対応箇所的一致を確認すれば、『法華玄贊』のチベット語訳であることを確認でき、著者の問題を論じる必要もない⁷⁾。むしろ、漢文とチベット語訳を比較して読むことで、テキストが途中で終わり、抄訳であることの理由もわかってくる。すなわち、翻訳されていない箇所には翻訳を行わなかった理由が存在するのである。本稿では、このことに焦点を当てて、チベット語訳『妙法蓮華註』の特徴をまとめてみる。

ことを示唆する。法成については、上山1990, 84-246を参照。また、『法華玄贊』については、そのウイグル語訳も断片が複数存在しており、中国の西域でよく読まれていた可能性もある(上山1990, 366-374)。チベット語訳の経緯をウイグル語訳の経緯と比較して考察する必要もあるかもしれない。ウイグル語訳については、百済1980, 1983, 1988, 1990を参照。

- 6) 渡邊1938, 218によると、漢文テキストにも日本将来本と中国将来本があり、その違いが大きいことが報告されている。それによると、前者の方が古い形で、チベット語訳も前者に近いものに基ついているようであるが、漢文テキストの詳細な校訂も必要である。
- 7) 『大谷大学図書館西藏大蔵経総目録・索引』(臨川書店, 1985, 688):では、著者をSa'i rtsa lag (Prthivibandhu)とするが、サンスクリットに還元する意味はない。テキストが一致する以上、どのようにして基が“Sa'i rtsa lag”となったのかを確認すればいいだけである。芳村1970, 365-266; 山口1970, 679においても著者の問題に言及するが、『法華玄贊』のチベット語訳ということに確信をもてなかったのだろうか。

1. 先行研究

『法華玄賛』の漢文に関する研究は、基の思想を含め、これまでにいくつかの論考が発表されているが⁸⁾、チベット語訳に対する研究はそれほど多くはない。基の法華経理解について考察するためには、漢文テキストを扱うだけで十分であり、チベット語訳は全く必要ないからである。そのチベット語訳が考察対象となるのは、それがチベット語訳された背景と、このテキストがチベット仏教においてどのように受容されていたのかを考察する場合だけである⁹⁾。もちろん、基の思想がチベットにおいてどのように理解されていたのかを知る第一次資料にもなりうるのだが、それはあくまでも本テキストが中国の法相宗の基の著書として認識されている必要がある。

本論のチベット語訳を扱った先行研究については、次のものを確認することができる。

渡辺1938 渡辺瑞巖「藏文法華経註釈について」『大崎学報』92:

-
- 8) 基の研究については、同じ法相宗の門測と対比して思想的特徴を明らかにするものが多い。特に、前者による『法華経』の注釈書である『法華玄賛』と後者による『解深密経』の注釈書である『解深密経疏』の一乗解釈が論点になっている。これについては、伊藤2008, 2009a, 2009b; 橋川1996, 2001, 2002, 2003, 2005; 吉村1999, 2001, 2013を参照。その他、基とその著書については、林2007, 2011を、『法華玄賛』の思想的特徴については、布施1937; 勝呂1972; 寺井1985を、『法華玄賛』と中国における他の『法華経』の注釈書を比較したものとしては、末光1986; 寺井1986a, 1987bを、日本天台宗の門珍の『法華論記』における『法華玄賛』批判については、前川2002, 2004, 2005を参照。
- 9) 『法華経』に対するその他の注釈書がチベットで著されていれば、本テキストに対する言及も見られるのであろうが、現時点でそのような言及は確認できていない。チベットにおける『法華経』の受容については、中村1976; 望月2006, 2007を参照。また、チベット人が漢文をどのように翻訳したのかを知るための言語学上の資料にもなる。

17-232.

- 山口1970 山口益「チベット仏典における法華經—法華玄賛のチベット訳本について—」金倉圓照編『法華經の成立と展開』平樂寺書店: 675-693.
- 中村1972 中村瑞隆「西藏訳正法蓮華註と法華玄賛に見られる三草二木喩」坂本幸男編『法華經の中国的展開』平樂寺書店: 695-716.
- 遠藤1984 遠藤充久「西藏訳正法白蓮華經註について—提婆達多品の訳語を中心に—」『法華文化研究』10: 17-27.
- 則武2003 則武海源「藏文法華註 Dam pa'i chos punda ri ka'i 'grel pa の基礎的研究」『法華文化研究』29: 29-39.

最初のものは、テキストの序文を漢文テキストと比較考察し、その相違を明らかにしている。特に、鳩摩羅什訳に加えられた「提婆達多品」の問題と章の数とその順序の相違から生じた問題について取り上げ、混乱が生じた原因を分析している。このチベット語訳が『法華玄賛』研究の第一次資料になり得ないからであろうが、次の山口の論考がでるまでには30年の隔りがある。山口は、チベット訳の各章の場所を同定し、引用される『法華經』の本文を比較し、訳語の検討を行っている。山口と同じく『法華經研究』のシリーズの一書に収録された中村の論考は、『法華經』の三草二木の譬喩に対する基の解釈を『法華玄賛』の漢文とチベット訳に基づいて考察し、それを中国の諸注釈書と対比するものである。関連する箇所チベット語訳の和訳を含んでいるものの、前述のように基の解釈を中国仏教のコンテキストで論じるのならば、チベット語訳を参照する意味はなく、論点が二重構造になっている。遠藤のものは、チベッ

ト語訳者が『法華経』の章立ての問題をどのように理解していたのかを考察したもので、章名に対する『法華経』のチベット語訳を『法華玄賛』の漢文テキストとそのチベット語訳のものと対比した上で、「提婆達多品」の問題を論じたものである。則武の論考は、先行研究の内容を簡潔に整理しており、今後の研究を示唆するものの、その後の成果は発表されていない。

これらの先行研究から受けた印象は、チベット語訳テキスト全体の研究はまだ始まっていない、というものであった。そこで、身延山大学東洋文化研究所の法華経研究班では、『法華玄賛』の漢文とそのチベット語訳の比較研究のプロジェクトを立ち上げた¹⁰⁾。そのための基礎資料として、これまでチベット語の次の章の和訳を発表し、その対応関係を提示してきた。

「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13, 2013: 1-22.

「チベット語訳『妙法蓮華註』「薬草喩品」和訳」『身延山大学東洋文化研究所報』19, 2015, (forthcoming).

「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』14, 2014: 1-18.

「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳」『身延論叢』20, 2015: 1-54.

「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19, 2014: 35-58.

「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『松村壽巖先生

10) チベット語訳テキストと漢文テキスト、ならびに引用される『法華経』のチベット語訳と漢訳の対応関係を明確にした校訂テキストを作成する予定である。

古稀記念論文集 日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林,
2014: 41-51.

「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39, 2013:
1-15.

「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』6, 2014:
7-22.

最初のものは、テキストの冒頭部分の和訳を含んでおり、後のものは
テキストの後半部分から和訳作業を行ったものである。翻訳が終了した
箇所は、まだテキスト全体の分量の三分の一程度でしかないものの、11
章中の7章を終えたことで、チベット語の特徴が解ってきた。すなわち、
チベット語訳は漢文の抄訳と言われているが、翻訳が省略された箇所に
は明確な理由があることがわかってきた。以下に、漢文とそのチベット
語訳を対比しながら、その翻訳の特徴を示しておく。

2. 著者について

チベット語訳テキストが示す著者に関する情報については、すでに論
じられているように、テキストの冒頭と奥書に与えられているだけであ
る。それを示すと、次のとおりである。

『正法白蓮華註』漢語から翻訳されたもの

dam pa'i chos puṇḍa rī ka'i 'grel pa rgya las bsgyur ba / (B. 476.1)

『正法白蓮華註』シンガラ国の軌範師セーツァラクにより著されたものを
完成した¹¹⁾。

dam pa'i chos padma dkar po'i 'grel pa yul sing ga la'i slob dpon sa'i rtsa
lag gis byas pa rdzogs so // (B. 795.10-11)

最初のものは、表紙に付されたものであろうが、タイトルに続いてそのテキストが漢文から翻訳されたことが示されている。チベット語の“rgya”については、「インドの」という意味もあるが、テキストが『法華玄賛』と一致することから「漢語から翻訳された」と読むことに問題はない。

ただし、後者の奥書については、若干の問題がある。チベット語訳が「見宝塔品」の途中で突然に終わることについては、後で考察するが、そこにこの記述が見られる。著者名は“sa'i rtsa lag”とあるが、それを訳してみると「大地の根本の手」となる。このチベット語から対応する中国人名を捜すことは困難であるが、テキストの対応関係から基の名前のチベット語訳がこのように翻訳したと考えて問題はないであろう。ただし、その前の“yul sing ga la”が問題である。「シンガラ国」はスリランカが想定されるが、基がスリランカ出身だという情報はない。ただしテキストが一致することから、著者の出身地に関する情報がチベット語訳者には異なって伝えられたということになる¹²⁾。また、テキストが途中で終わっているにもかかわらず、「完成した(rdzogs)」と記されている。他のテキストに準じて、このように記した可能性もあるが、翻訳者が翻訳を途中で終えたことを認識していたとするのならば、この記述は翻訳とは異なる時点で付された可能性もある。もちろん、翻訳者が所有していた漢文テキストが不完全なものであった可能性も排除できないが、以下に論じる「提婆達多品」の問題を考えると、意図的に途中で終了したと考

11) 望月2014b, 13.

12) 基の出自については、林2011, 16-17; 林2012, 73-74を参照。それによると、出身地は代郡であり、幼少時に長安付近に移ったようである。

える方が妥当である。そうすると、この著者情報は後に付された可能性も残る。

3. 『法華経』の章の数と配置の問題

漢文とチベット語訳の相違が生じる最大の起因は、両者が依拠した『法華経』が異なっていることである。前者は、鳩摩羅什による『妙法蓮華経』を引用するのに対して、後者はチベット語訳『法華経』で引用を確認している。そのために、『法華経』の翻訳が異なる時点で、両者の読み方の相違が生じるのである。

最初に、『法華経』の漢訳とチベット語訳では章の数が異なっている。すなわち、前者では「提婆達多品」が独立した章とされて、全部で28章となっているが、チベット語訳では「提婆達多品」が独立しておらず、全部で27章である。チベット語訳が、「提婆達多品」の解説を行わずに、「見宝塔品」の途中で終わっていることもこのことが要因であろう。チベット語訳者は、この問題が理解できていないために、それに誘発されるさまざまな問題がチベット語訳には存在する。

まず、全体の章の数の相違に起因するものについて、序文¹³⁾の『法華経』の28章の構成を解説する箇所に見ることができる。

其品得名者經有二十八品謂序品…法師品見寶塔品提婆達多品勸持品安樂行品…如來神力品囑累品藥王菩薩本事品妙音菩薩品觀世音菩薩普門品陀羅尼品妙莊嚴王本事品普賢菩薩勸發品 (T. 658c15-23)

13) 漢文は、序文の冒頭に序文を述べる理由(T. 651a6-29)が述べられるが、チベット語訳はその部分の翻訳を欠いている。

この経典の中から、章の数と名称を説いたものは27章のものがあるうち、最初の「序品」と…「見宝塔品」と「勸持品」と「安樂行品」と…「如来神力品」と「陀羅尼品」と「藥王菩薩本事品」と「妙音菩薩品」と「觀世音菩薩品」と「妙莊嚴王本事品」と「普賢菩薩勸発品」と「囑累品」である¹⁴⁾。

mdo sde 'di'i nang nas le'u'i grangs dang ming bstan pa ni le'u nyi shu rtsa bdun zhig yod pa las / dang po gleng gzhi'i le'u dang / … mchod rten bstan pa'i le'u dang / mos pa bya ba'i le'u dang /… de bzhin ghesgs pa'i rdzu 'phrul mngon par 'du byed pa'i le'u dang / gzungs sngags kyi le'u dang / sman gyi rgyal po'i sngon gyi tshul gyi le'u dang / sang sang po'i dbyangs kyi le'u dang / kun gyi sgo'i le'u dang / dge ba'i rgyan gyi sngon gyi tshul gyi le'u dang / kun du bzang po mos par bya ba'i le'u dang / yongs su gtad pa'i le'u'o // (B. 488.12-489.5)

漢文が全体を28章として各章のタイトルを列挙するのに対して、チベット語訳は27章として「提婆達多品」のタイトルを欠いている。また、「囑累品」の位置も漢文では22番目にあるのに対して、チベット語訳は同経のチベット語訳の順序に従い、27番目の最期に置かれている。漢文は依拠した鳩摩羅什の翻訳した『妙法蓮華經』に基づいて解説しているのだが、チベット語訳者は同経のチベット語訳に基づいて修正しているために、章の数が異なり、後半の章の順序も異なっている。

この章の数の解説の最後に、漢文は『法華經』の漢訳における「提婆達多品」の問題に言及している。

又云合有二十七品以天授品與寶塔同品四本違三寔爲未可 (T. 660b1-3)

14) 望月2013b, 11-12.

「安樂行品」と「見宝塔品」の二つは、原因と結果の二つを結びつけるために、不確定で、まとめて27である¹⁵⁾。

bde ba la gnas pa dang / mchod rten bstan pa gnyis ni rgyu dang 'bras bu gnyis kar 'brel pa'i phyir ma nges pa ste / spyir nyi shu rtsa bdun no // (B. 489.10-11)

漢文は、ここでは「提婆達多品」を「天授品」と記し、それが「見宝塔品」から別立てされていない異本の存在に言及している。すなわち、『妙法蓮華經』以前の漢訳では、「提婆達多品」が「見宝塔品」に含まれているために、章の数が27品となることを示している。それに対してチベット語訳者は『法華經』の「提婆達多品」を認識できておらず、「天授品」に対する訳語として同經のチベット語訳では「見宝塔品」の次に相当する「安樂行品」の訳語をあてている。彼は、何故に27章の数が問題になっているのかを理解できず、章のタイトルも同經のチベット語訳に既存の「安樂行品」をあてたのであろう。それ故に、「章の数」に続く「章の順序」の解説においても、チベット語訳者は章の数を補足している。

第五彰品次第者 (T. 660b4)

27章の次第の解説は¹⁶⁾、

le'u nyi shu rtsa bdun gyi rim pa bshad pa ni / (B. 489.12)

漢文の「品次第」に対して、チベット語訳は「27章の次第」と数字を補うことで『法華經』の章の数を再確認している

15) 望月2013b, 12.

16) 望月2013b, 12.

これらの「提婆達多品」の有無の問題と「嘱累品」の位置の問題については、複数の『法華経』の漢訳を知る基には自明のことであり、その問題を取り上げて解説する。それに対して、チベット語訳者は、そこで議論されている内容が理解できないために混乱が生じ、その箇所の子ベット語訳に相違が生じるのである。それを示すのが漢文の「顯經品廢立」に対応する箇所である。

第四顯經品廢立者案此經根本秦姚興時鳩摩羅什所翻二十七品無提婆達多品沙門道慧宗齊録云… (T. 659a17-)

(チベット訳対応箇所欠落)

この箇所は、鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』に「提婆達多品」が加えられる経緯、「嘱累品」が「神力品」の次に配置されること、「觀世音菩薩品」において偈頌が加えられる経緯を解説したものである。基は、彼が所持している『妙法蓮華経』がどのような経緯を経て現行本に至ったのかを説明しているのだが、チベット語訳者は、この漢訳の諸訳間の異同について検証することもできなかった、この箇所の翻訳を行っていない。

チベット語訳者は、「提婆達多品」の存在が理解できないために、その名称が出てくるたびに、問題が生じることになる。冒頭の序論の「求める原因」を解説するところで、「提婆達多品」が漢文では「天授品」として、同品の経文が言及されている。

酬求因者天授品云 (651c4-5)

それを求める原因は、「勸持品」に17)、

17) 望月2013b, 6.

de la tshol ba'i rgyu ni mos par bya ba'i le'u las / (B. 478.6-7)

チベット語訳では、「天授品」が『法華經』の何れかの章であることは認識されているものの、「勸持品」に対応するチベット語訳が言及されている¹⁸⁾。經文の内容を確認すれば、漢訳の「提婆達多品」に相当する文章を「見宝塔品」の後半に確認できるので、ここでは「勸持品」ではなく「見宝塔品」とすることもできたはずである。しかしながら、「勸持品」としたことから、次のことが推測できる。すなわち、チベット語訳者は漢文に見られる「天授品」「提婆達多品」が「見宝塔品」の次に来る章のことであることを認識していたことになる。しかしながら、その經文が「見宝塔品」にあることを理解しておらず、同品から別立てされた章であるという認識までには至らなかったことになる。このことから、チベット語訳者は「見宝塔品」の内容を熟知していなかった可能性もある。

これと同じことは、『法華經』の各章の内容を順序通りに簡略に解説する次の箇所においても見ることができる。

依法修學若法若人可師範故破小執而成大道會權旨以入眞宗信學既希歸崇亦尠多實現塔分身佛集勸長時明信證說不虛故有見寶塔品雖他佛說證信此經未顯自尊勸人歸仰故顯身作國王爲重此經於彼怨家爲床求法亦顯經威廣大度龍宮衆極多法力速成化龍女以成道故有提婆達多品 (T. 659b28-c7)

聖教の通りに成就して、眞実そのものを理解することの別の特相である信を起こすために過去の聖者たちが現れる「見宝塔品」が説かれている。そ

18) ただし、『法華經』のチベット語訳では「信解品」が“mos pa”で、「勸持品」は“spro bar bya ba”であるのだが、『法華玄贊』のチベット語訳では「信解品」は“dad pa”と訳されているので、ここでも「勸持品」に言及しているとみなしていいであろう。渡邊1938, 224-226. 渡邊は、チベット文字の類似による誤写の可能性に言及する。Cf. 遠藤1984, 25.

の意味を自分自身で理解するだけに尽きずに、利他もなすことを意図することで王の身体に変化して法を説くためにその次に「化城喩品」が説かれている¹⁹⁾。

lung bzhin bsgrubs te yang dag pa nyid chud pa'i rtags gzhan dad pa
bskyed pa'i phyir sngon gyi 'phags pa rnam 'byung ba'i mchod rten gyi
le'u bstan to // don de bdag nyid kyis chud par ma zad kyi gzhan gyi don
yang bya dgongs pas rgyal po'i lus su sprul te chos ston pa'i phyir de'i 'og
tu sngon byung ba'i le'u bstan to // (B. 490.15-19)

漢文では、「見宝塔品」の次に「提婆達多品」の概略が説かれているのだが、チベット訳ではその章名に「化城喩品」に相応するチベット語訳が与えられている²⁰⁾。漢文では、「提婆達多品」の次に「勸持品」が来るために、チベット語訳者は、「見宝塔品」と「提婆達多品」の間にある章が何れの章を指すのかを考え、「化城喩品」としたのであろう。ただし、ここでも「見宝塔品」の内容を理解できていれば、「提婆達多品」とされる概略が同品の後半に挿入されていることを理解し、翻訳の在り方も少し変わったのであろうが、全く異なる「化城喩品」に言及するので、このことから「見宝塔品」の内容を熟知していなかった可能性がある。

前述のように、チベット語訳者は『法華経』の漢訳における「囑累品」の位置の問題についても認識しておらず、漢文においてそれを説明する意味を理解できていない。

讚勸既周化縁已畢慇懃付授遠使流通故有囑累品此依正法華及論囑累品

19) 望月2013b, 12; 遠藤1984, 24.

20) ただし、「化城喩品」のタイトルの漢訳にも問題があり、チベット語訳者は『法華経』のチベット語訳に従って「過去の生起」と修正している。

居後釋其次第若神力品後即說囑累人情曲解未契通途也 (T. 661a12-15)

この經典の解説の本文を完成し、到彼岸によりその次に教えを付与するに値するので、その次に「囑累品」が置かれる²¹⁾。

mdo sde 'di bshad pa'i gzhung rdzogs shing mthar phyin pas de'i 'og tug gdams shing gtad par 'os pa'i phyir de'i 'og tu yongs su gtad pa'i le'u bzhag go // (B. 492.18-20)

この漢文では、『正法華經』ならびに『法華論』によると「囑累品」が最後にあるものの『妙法蓮華經』に依拠した本論では「神力品」の次に解説を行うことが述べられている。チベット語訳では、「正法華」と「論」が何を意味するのかと、『妙法蓮華經』では「神力品」の後に「囑累品」が来ることを理解できておらず、その部分の翻訳を欠いている。『法華經』のチベット語訳では、「囑累品」は最後に配置されているので、チベット語訳は、その通りに結んでいる。

4. 『法華經』の漢訳とチベット語訳の翻訳の相違

前述のように、漢文の著者とチベット語訳者が依拠した『法華經』のテキストが異なるために、両者の間に『法華經』の章の配置の理解に相違があることを示したが、依拠する『法華經』の相違は、個々の解説文におけるさらなる相違も誘引している。

まず、第7章「化城喻品」と第9章「授学無学人記品」は、その章のタイトルが漢文とチベット語訳では異なるために、その章の意味を解説する「釈名」のチベット語訳は異なるものとなっている。「化城喻品」のタイト

21) 望月2013b, 13.

ルは、前述のように、『法華経』のチベット語訳では「過去の生起」となっているために、本論チベット語訳では混乱が生じている。

三門分別一來意二釋名三解妨來意有四一者上中根類聞法得記下根之徒猶未明解故陳過去已結大乘之緣并說現在小果化城之喻陳往因令其證實述今果令其捨權遣生覺解方可爲記故此品來 (T. 789b16-21)

これ以後は「過去の生の章」が解説され、以前の如来が仏の所作をなし、大乘の意味を行じるそのことが説かれれば、追隨が起こされるので、その原因が説かれ、信解が生じるのでこの章が説かれている。これは何から名付けられたのかと、その名称と、その問答の三種を説いている。

'di man chad sngong byung ba'i le'u 'chad de / sngon de bzhin gshegs pasangs rgyas kyi mdzad pa mdzad cing theg pa chen po'i don spyod pa de bstan na rjes su 'jug pa bskyed pa'i phyir rgyu de bstan cing mos pa skye bar bya ba'i phyir le'u 'di bstan to // 'di ci las btags pa dang / de'i ming dang / de dris pa'i lan rnam pa gsum zhig ston te / (B. 740.8-11)

漢文は、他の章と同じように、来意・釈名・解妨の「三門」から始まるが、チベット語訳は章のチベット語訳タイトルである「過去の生」の説明から始まり、三門を来意・名称・問答としている。ただし、チベット語訳のこの説明は、漢文の来意の四項目の第一項の説明文であるのだが、チベット語訳者は「化城喻品」ではなく、「過去の生」であることを最初に示したかったのであろう。漢文は、「来意」の後に「釈名」の解説が来る。

釋名者禦寇安神之所曰城本無而有曰化禦寇者息生死之疲安神者證恬寂

之樂故喻於城佛假權施名之爲化城即是化名曰化城今是喻法此品廣明名化城喻品 (T. 790a18-22)

(チベット訳対応箇所欠落²²⁾)

チベット語訳では、「來意」の箇所での「化城喻」の言及があり、本章の内容を認識しているものの、「釈名」の箇所の翻訳を欠いている。さらに、漢文では「解妨」の解説において、『正法華經』では章の名前が「往古品」となっていることに言及するが、それに対応するチベット語訳は欠けている。

正法華名往古品謂顯過去佛曾教化發大乘種令其憶念爲今熟因望其意解引入大乘非正破病故今此經不以往古爲品號又化城果今現得大通事在往因以顯果爲品名不以隱因爲品稱亦無失也 (T. 790a29-b4)

(チベット訳対応箇所欠落²³⁾)

チベット語訳者は、チベット語訳と同じことを意味する「往古品」の意味は理解できたのであろうが、「正法華」が法護訳の『正法華經』を意味することが理解できなかったのであろう。

同じような事例は、「授学無学人記品」にも見ることができる。『法華經』のチベット語訳では、この章は「二千比丘授記」となっている。最初の三門について、すでに混乱がある。

三門分別一來意二釋名三解妨 (T. 805c8)

22) 望月2015a, 5, 注(6).

23) 望月2015a, 5, 注(7).

これ以後は「二千比丘授記品」の解説で、それも二種に区別される。この章が何から名付けられたのかの理由と、この章の名称が解説される²⁴⁾。

'di man chad dge stong nyis stong lung ston pa'i le'u 'chad de / de yang
nam pa gnyis su dbye'o // le'u 'di ci las btags pa'i gtan tshigs dang / le'u
'di'i ming bshad pa'o // (B. 771.2-3)

章名を確認した後に、「三門」の見出しの段階で、すでに「解妨」の項目はなく、その解説文の翻訳もなされていない。この「釈名」は、次のように翻訳されている。

釋名者趣求進習名學進習止滿名無學今佛與彼記名授學無學人記品 (T. 805c12-13)

名称の解説は、これらの学と無学の中に授記するために他の二千の比丘に授記するからである²⁵⁾。

ming bshad pa ni slob pa dang mi slob pa rnams 'di'i nang du lung ston
pa'i phyir dge stong gzhan nyis stong lung bstan pa'i phyir ro // (B.771.7-9)

チベット語訳では、「学無学」に言及しているが、冒頭で章のタイトルを「二千の比丘の授記」と述べている。それ故に、章のタイトルの解説文に、漢文にはない「二千の比丘の授記」の句を加えている。ただし、チベット語訳では、この章を「学と無学の授記の章」と述べている箇所もあり²⁶⁾、チベット語訳者は漢文の章名の相違を認識していた可能性もある。

24) 望月2014a, 43.

25) 望月2014a, 43.

26) B. 490: 12-13: slob dang mi slob pa rnams lung bstan pa'i le'u.

さらに、『法華經』の漢訳では、偈頌を翻訳する際に、音韻の数ではなく、文字の数により韻律を示すために、チベット語訳と偈の数に対応しない事例が多く見られる。例えば、「藥草喻品」の前半の偈は、鳩摩羅什訳では54偈半あるのに対して、サンスクリットとチベット語訳は44偈である²⁷⁾。そのために、チベット語訳者は、漢文が指摘する『法華經』の偈文を特定することが困難になり、翻訳に欠落が生じている。偈の数え方の違いは随所に見られ、例えば、「法師品」の後半の偈の数は、鳩摩羅什による漢訳では18偈半であるのに対して、チベット語訳では20偈で、1偈半の相違がある。

經 若人說此經至處此爲說法 贊曰下十一頌半說法儀軌中有二初二頌半頌儀軌後九頌頌佛隨順此初有二一頌半標教一頌釋之(T. 810c29-31)

經に、「衆生らに」と言うものから「供養をなす」と言うまでには、この13偈により法を解説する在り方が説かれており、そこで11偈により在り方そのものが説かれ、2偈により聞くことと解説が説かれている²⁸⁾。

mdo las / sems can rnam la zhes pa nas mchod pa byed ces pa'i bar du ni
tshigs bcad bcu gsum po 'dis chos 'chad pa'i tshul bstan te / de la tshigs
bcad bcu gcig gis ni tshul nyid bstan / tshigs bcad gnyis kyis ni nyan pa dang
'chad pa bstan to // (B. 784.15-18)

この数の相違が、偈頌の構成を分析する箇所にも見られ、漢文が11偈半とするところをチベット語訳は13偈としている。そのために、漢文

27) ただし、「藥草喻品」では、鳩摩羅什訳は後半の偈に対する翻訳を欠いており、それに依拠した『玄賛』も後半部分に対する注釈を行っておらず、そのチベット語訳もそこで終わっている。このことは、漢文とチベット語訳の同一性も示している。

28) 望月2013a, 7.

はこの11偈半を2偈半と9偈とわけ、前者をさらに1偈半と1偈に分けているが、チベット語訳は13偈を11偈と2偈に分けているだけである。すなわち、『法華経』の漢訳を見ることのできないチベット語訳者は、漢文の偈頌の数が見るべき意味が理解できないのである。その他にも、偈をめぐる問題としては、韻律を重視し、語句の順序に縛られないサンスクリットに対して、語句の順序に縛られる漢訳では、翻訳の際にパーダの順番を入れ替える事例が多く見られる。そのために、チベット語訳においてもこの影響を受けた混乱が存在する。

さらに、『法華経』の漢訳とチベット語の相違として、漢訳にしかない文がある。そのような文章の解説文に対してチベット語訳は翻訳を欠く事例がある。例えば、「五百弟子受記品」の次の解説文は、チベット語訳されていない。

經 其人醉臥都不覺知 賛曰第二領中途方退當時猶爲煩惱惛醉雖臥大乘親友之舍不自覺知有菩提心珠唯識引經惛醉纏心曾無醒覺彼以末那相應無明名爲醉體今以第六不共無明正爲醉體在異生位起遊行故 (T. 804c15-20)

(対応する法華経の偈をチベット訳は欠くために、チベット訳対応箇所欠落)

この経文の前項後半「與之而去」と次項前半「起已遊行」は、『法華経』のチベット語訳「衣服の端に結びつけた(gos kyi tha mar phur to)」と「それから、世尊よ、その人は(de nas bcom ldan 'das de skyes)」は連続しており²⁹⁾、間に「其人醉臥都不覺知」という句に対応するチベット文は存在しない。すなわち、チベット語訳者は、『法華経』のチベット語訳を確認

29) 望月2014d, 42-43.

した上で、そこには存在しない句に対する解説文の翻訳を行わなかった可能性がある。

5. Vasubandhuへの言及

『法華玄贊』にはヴァスバンドゥに帰される『妙法蓮華經優波提舍(=法華論)』に対する言及が多数ある。中国の唯識学派である法相宗の基がインドの唯識学派の大成者による『法華經』の解説書に依拠することは自然なことである。漢文では「論曰」で言及され、それをチベット語訳者は「注釈より(’grel pa las)」と翻訳しているのだが、チベット語訳独自の言及も見られる。テキストの冒頭部分において序論の行を解説する際に次の記述を見ることができる。

酬行因者方便品中准論釋經八甚深云 (T. 651b15-16)

そこで、行の根本も「方便品」からこの經典を註釈したヴァスバンドゥにより八甚深が説かれている如く³⁰⁾。

de la spyod pa’i gzhi yang thabs mkhas pa’i le’u las mdo sde ’di’i ’grel pa
su ban dhus zab mo brgyad bstan pa bzhin te / (B. 477.5-6)

ここでは、漢文の「准論」に対してチベット語訳ではヴァスバンドゥの『法華論』を想定している。ただし、このチベット語訳の原文では “pa su ban dhu” に対する音写語となっており、ヴァスバンドゥに対する一般的なチベット語訳の “dbyig gnyen” とは異なっている点に注意が必要である。その他の読み方も推定するべきであるが、“su ban dhu” や “ban dhu”

30) 望月2013b, 5-6.

を他のチベット語で読むことは困難である。また、この記述がヴァスバンドゥを指すのならば、漢文にない名称をわざわざ翻訳することで、『准論』が彼の『法華論』であり、そこに「八甚深」が説かれていることをチベット語訳者は認識していた可能性がある。『法華論』のチベット語訳は現存しないが³¹⁾、チベット語訳者は『法華経』とその内容を知っていた可能性がある。

6. チベット末伝のテキスト

チベット語訳には、漢文で言及される固有名詞や文献の名称を特定できずに、省略される事例を見ることができる。固有名詞には、音訳や意訳などさまざまな事例があるが、前者については漢字の音に対する知識が必要となる。また、文献に対しては、チベットに伝承していないものが省略した形で言及されていれば、なおさら特定困難なものとなる。序文における經典の一般的意味解説の解説では、『阿含経』『般若経』などの經典が、次のように解説されている。

且古經論宗致極多舊四阿含及僧祇律大衆部義三彌帝論上座部義舍利弗阿毘曇梵網六十二見經正量部義四分律是法藏部義此等經論復是何宗然文殊問經及宗輪論說小乘有二十部謂大衆部一説部說出世部雞胤部多聞部說假部制多山部西山住部北山住部說一切有部雪轉部犢子部法上部賢冑部正量部密林山部化地部法藏部飲光部經量部并大乘二合二十二宗今依文判教教但有三若以類准宗宗乃有八教但三者一多説有宗諸阿含等小乘義是雖多説有亦不違空二多説空宗中百十二門般若等是雖多説空亦不違有(T.

31) 『法華論』のチベット語訳の可能性については、大竹2011, 113-114を参照。

657a13-27)

また声聞のそれぞれの教義が異なり、大衆部などの教義が異なり、二十二見が異なるので、それぞれに説くことも多いが、略して三つである。有部は小乗の典籍である阿含などを説いていても、最後には空性の特徴と異ならない般若波羅蜜の典籍のような空性を説いたものも、有とは矛盾していない³²⁾。

yang nyan thos pa so so'i gzhung mi mthun pa ma hā sang gi ga la sogs pa
 gzhung mi mthun pa nyi shu rtsa gnyis su lta ba mi mthun pas so sor smos
 pa yang mang mod kyī mdor rnam pa gsum ste / yod par smra ba theg pa
 chung ngu'i gzhung ā ka ma la sogs pa bstan pa yang mthar stong pa nyid
 kyī mtshan nyid dang tha dad pa ma yin shes rab kyī pha rol tu phyin pa'i
gzhung lta bu stong pa nyid du bstan kyang yod pa las 'gal ba ma yin no //
 (B. 486.12-487.1)

チベット語訳者は、『阿含経』を小乗の典籍と認識してするものの、『文殊師利問経』と『異部宗輪論』などに基づいて列挙される部派名の翻訳を欠いている。「大衆部」のみ一致するので、単なる省略の可能性もあるが、部派名の特定が困難であったという理由も考えられる。また、後半の『般若経』の解説では、漢文は、中国の「空宗」としてナーガールジュナに帰される『中論』『百論』『十二門論』に言及するが、チベット語訳はなされていない。三論という概念がチベットに伝わっていなかったのであろうが、チベット語訳者は、特に『十二門論』が特定できずに、前の「百」も一般的な数詞ととらえ、『中論』までも読み取れなかった可能性がある。

チベットに伝承していないナーガールジュナの著書については、他所

32) 望月2013b, 10-11.

にも同じような事例を見ることができる。『見宝塔品』の冒頭では『大智度論』が引用されている。

來意有四…四者智度論云有佛出世無人請説…(T. 811a13-)

設定される理由にも四種あり³³⁾、

gdags pa'i gtan tshigs la yang rnam pa bzhi ste / …(B. 785.8-)

ここでは、章の「来意」を四項目で説明しているのだが、チベット語訳は、第四項の『大智度論』の引用部分の翻訳を欠き、三つの理由しか述べていない。おそらく、「智度論」が何れかの論書を示しているという認識はあったのであろうが、典籍の確認ができなかったからなのか、その翻訳をすべて欠いている。

さらに、彼の『十住毘婆沙論』に対しても、同じような事例を見ることができる。「法師品」において、禅定による空観について経論を引用しながら次のように解説している。

維摩以四靜慮爲床彼據智所生依以靜慮定爲床今據智所縁依以法空爲床亦不相違大慈悲有觀也衣座二空觀也謂生空法空如次依十住毘婆沙說法處師子座有四法一先應恭敬禮拜大衆然後升座二衆有女人應觀不淨三威儀瞻視有大人相顔色和悦人皆信受不説外道經書心無怯畏四於惡言問難當行忍辱復有四法一不輕自身二不輕聽者三不輕所説四不爲利養對法顯揚瑜伽等中皆有問難說法等相應廣如彼 (T. 810b25-c6)

法の空性を説いたものも、諸経にも「四禅は座で」と述べられ、空性と無相にとどまることも座のように見られる³⁴⁾。

33) 望月2014b, 8.

chos stong pa nyid du bstan pa yang mdo dag las kyang bsam gtan bzhi ni
gdan te zhes pa stong pa nyid dang mtshan ma med pa la gnas pa nyid gdan
 lta bur blta'o // (B. 783.18-20)

最初の『維摩經』についても、經文の引用はあるものの、經典名が音写語であるために特定できておらず、「諸經」とするものである。後半の『十住毘婆沙論』への言及については、チベット語訳がなされていない。チベット語訳者は、「十住毘婆沙」が意味するものが理解できなかったために、翻訳を行わなかった可能性もあるが、単に引用文として省略したのかもしれない。

チベット語訳全体の特徴として、經論の引用の翻訳を省略する傾向にある。このことは、引用典拠をチベット大藏經に確認することが諸事情により困難であったからなのか、あるいは確認をする前段階で翻訳が中断してしまったからなのか、その理由は明らかではない。しかしながら、チベット未伝の文献については、テキストの特定が容易ではなかったことは明らかである。

7. 漢語による解釈

漢文には、漢語独自の語義解釈などもあり、そのニュアンスを含め、他国語に翻訳しにくい箇所もある。序文の構成の相違により見出しの番号は異なっている³⁵⁾ものの、テキスト冒頭に經典名の解釈について論じ

34) 望月2013a, 6.

35) 漢文では、序文を、1 叙經起之意、2 明經之宗旨、3 解經品得名、4 顯經品廢立、5 彰品之次第の五つに分けて解説するのに対して、チベット語訳は、1 經典の解説の序論、2 この經典の章の意味を説いたもの、3 章の順番により説いたものとの三つに分けて解説する。

ている。すなわち、『法華経』のサンスクリット名を漢字の音写で示した後に、経名に対する漢語での解説を行っている。

第三解經品得名者且經題目妙法蓮華經名者梵云薩達摩奔荼利迦素咀攬薩者正妙之義故法護云正法華羅什云妙法蓮華達磨法也奔荼利迦者白蓮華也西域呼白蓮華爲奔荼利迦故新經說青黃赤白四色蓮華云毘鉢羅華拘某陀華鉢特摩華奔荼利華如次配之蓮者芙蕖之實花者華也華美曰花也素咀攬者

(T. 657c3-10)

第二に、この經典の名称を解説したものについて、この經典は「正しい法の白蓮華」という經典で³⁶⁾、

gnyis pa mdo sde 'di'i mtshan bshad pa ni mdo sde 'di dam pa'i chos
padma dkar po zhes bya ba'i mdo sde ste / (B. 487.11-12)

チベット語訳では、經典名のサンスクリット名を音写することではなく、チベット語訳が述べられるだけで、それに続く解説の翻訳はなされていない。『法華経』のチベット語訳からそのサンスクリットを音写することは可能であるが、漢字の音を理解できないために、この部分が経題の音写と理解できなかった可能性がある。続く「正妙之義」の解説文についても、法護の翻訳による『正法華経』と鳩摩羅什の翻訳による『妙法蓮華経』の二つの漢訳が存在することを知らず、両者のタイトルの相違が論じていることが理解できなかったのであろう。また、“*punḍarīka*” に対する漢語の解釈についても、チベット語訳者にとっては理解の及ばない

そのために漢文の2, 3, 4がチベット語訳の2にまとめられ、そこで、漢文の2がチベット語訳では2.1 一般的意味に、3と4が2.2 經典の特徴にまとめられているので、漢文の第三項がチベット語訳では第二項の第二となっている。望月2013b, 4.

36) 望月2013b, 11.

ものであったのであろう。

8. 中国における法華經傳播の情報

前述のように、漢文では序文の「顯經品廢立」において鳩摩羅什訳に見られるテキストの問題を論じている。すなわち、鳩摩羅什訳に「提婆達多品」がなく、それが後に加えられた経緯、「囑累品」が「神力品」の後に置かれた理由、「觀世音菩薩普門品」に偈頌が補足されたことについてであるが、この項目全体がチベット語訳なされていない。

第四顯經品廢立者案此經根本秦姚興時鳩摩羅什所翻二十七品無提婆達多品沙門道慧宗齊録云上定林寺釋法獻於于闐國得此經梵本有此一品瓦官寺沙門法意以齊永明八年十二月譯出此品猶未安置法華經內至梁末有西天竺優禪尼國沙門拘羅那陀此云家依亦云婆羅末陀此云眞諦又翻此品始安見寶塔後復有燉煌沙門竺法護於晋武之世譯正法華其提婆達多品亦安在見寶塔品後…(T. 659a17-660b3)

(チベット訳対応箇所欠落)

これらの問題は、中国における『法華經』の漢訳の相違、ならびに『妙法蓮華經』がどのようにして現行の形に整えられてきたのかの経緯であり、そこには固有名詞や年代の記述も含まれている。これらの文章の翻訳には仏教の教義ではなく、中国仏教史の知識を必要とするために、翻訳がなされなかったのかもしれない。あるいは、『法華經』の漢訳において生じた問題をチベットに伝える必要性もないと思われたのかもしれない。いずれにせよ、項目の見出し語の段階でこの項目全体が削除されて

いるので、明確な意図をもって翻訳されなかったのは明らかである。

9. 中国独自の文献情報

漢文では、仏教以外の中国で著された典籍にも言及している。そのような典籍はチベットに伝承していなかった可能性もあり、チベット語訳者にとっては未知なる文献となる。

經 於是釋迦牟尼佛至開大城門 贊曰 佛正開也作吉祥兆故用右手鑰音以灼反玉篇門鍵也説文關下杜也方言關東謂之鍵關西謂之鑰鑰是古字耳有作籥字林書俗作僮筥也何承天纂文云關西以書篇爲書籥非此義 (T. 813c16-21)

經に、「それから世尊の」から「明らかにした」までの「右手」とは、吉祥をなすものである³⁷⁾。

mdo las de nas bcom ldan 'das kyi zhes pa nas / sa ler byas so zhes pa'i bar du phyag g-yas pa zhes pa ni bkra shis par bya ba'o // (B. 785.11-13)

何承天(370-447)は、中国の自然科学者であり、『達性論』という仏教批判の論書を著している³⁸⁾。ここでは、漢字の古字、および東西での相違を説明し、彼の『天纂文』が言及されている。チベット語訳者は、中国における漢字の用例の相違を理解できなかったのであろうが、ここで言及される仏典以外の典籍についても知識がなかったことであろう。

37) 望月2014b, 11.

38) 吉川、船山2010, 57, 75. これらの情報については、金剛大学の池田将則先生にご教示いただいたことを記してお礼申し上げます。Cf. 遠藤2008.

まとめ

これらの特徴から、チベット語訳が抄訳であると言われることには、明確な理由があることがわかる。その起因をまとめると、(1)『法華経』の漢訳と蔵訳の章の相違(「提婆達多品」「嘱累品」など)、(2)依拠する『法華経』の漢訳と蔵訳の相違(偈数、欠落等)、(3)チベット未伝の文献(『大智度論』『十二門論』『十住毘婆沙論』等)、(4)漢語による語彙解釈、(5)中国の独自情報(『法華経』の伝播、非仏教文献)となる。

チベット語訳者は、『法華経』に関しては、漢文に引用される鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』に依拠するのではなく、同経のチベット語訳に依拠している。これらの起因のいくつかも、そのことから派生したものである。また、引用経論については、未確認のものだけでなく、確認できるものについても、翻訳を省略する傾向にある。このことは、未確認典籍の存在が誘因となって典拠の確認を行うことを避け、引用経論の翻訳が省略された可能性もある。このようなことから、チベット語訳は漢文の原本よりも著しく短いテキストになっているのである。

また、チベット語訳者は、『法華経』の漢訳とチベット語訳の相違を認識していることから、漢文を直接に翻訳しているのではなく、『法華経』のチベット語訳を見ながら翻訳していることがわかる。それにより、漢文の問題点を経典のチベット語訳で修正していたことも確認できる。そこで修正できない点が、上記の問題点として生じたのである。ただし、翻訳がまだ未完成な段階であった可能性も否定できない。

참고문헌

Herrmann-Pfandt, Adelheid

2008 *Die lHan kar ma: Ein früherer Katalog der ins Tibetische übersetzten Einleitung und Materialien*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Jang, Gyueon

2013 *Translation and Annotation of the Section on Gotra-Theory in “Mujaseongsang pun” of Haesimmilgyeong so by Woncheuk: With a Critical Revision Based on Its Tibetan Translation (in Korean)*. Seoul.

伊藤尚徳

2008 「中国における一乗の意義—基の一乗観を中心に—」『密教学研究』40: 53-77.

2009a 「初期中国唯識学派における一乗義について—基と圓測の解釈を中心として—」『大正大学総合佛教研究所年報』31: 252-268.

2009b 「圓測の一乗観—『解深密經疏』における三乗と一乗の平等性」『智山学報』58: 83-105.

稲葉正就

1944 「円測撰解深密經疏の西藏訳に就て」『大谷学報』97: 50-65.

1972 「円測・解深密經疏の散逸部分の漢文訳」『大谷大学年報』24: 1-132.

1976 「解深密經疏のチベット訳について」『大谷学報』56-2: 66-70.

上山大俊

1990 『敦煌仏教の研究』法蔵館

遠藤充久

1984 「西蔵訳正法白蓮華經註について—提婆達多品の訳語を中心に—」『法華文化研究』10: 17-27.

遠藤祐介

2008 「『達性論』論争について」『蓮華寺佛教研究所紀要』1: 117-140.

大竹晋

2011 「『妙法蓮華經憂婆提舍』解題」『新国訳大蔵經 积経論部18 法華論・無量寿経論他』大蔵出版: 100-155.

橘川智昭

1996 「円測撰『解深密経疏』における一乗論について」『印度学仏教学研究』45-1: 56-58.

2001 「円測の五姓各別思想—円測思想に対する従来解釈の再検討と基教学との比較—」東洋大学学位論文

2002 「慈恩教学における法華経観」『仏教学』44: 23-53.

2003 「元暁と基—真如観と衆生論—」『印度学仏教学研究』51-2: 547-551.

2004 「慈恩基の如来蔵観と〈自性〉」『宗教研究』77-4: 1054-1055.

2005 「中国唯識にみる二種一乗義の俱有について」『印度学仏教学研究』53-2: 688-692.

百済康義

- 1980 「ウイグル訳『妙法蓮華経玄賛』(1)『仏教学研究』36: 49-65.
- 1983 「妙法蓮華経玄賛のウイグル訳断片」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社: 185-207.
- 1988 “Uigurische Fragmente eines Kommentars zum *Saddharmapundarika-Sūtra*,” in: *Der türkische Buddhismus in der japanischen Forschung*, ed. Jens Peter Laut, Klaus Röhrborn, Wiesbaden: Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, 34-55, 102-106 (Tafeln).
- 1990 「ギメ美術館所蔵『妙法蓮華経玄賛』ウイグル訳断片」『龍谷紀要』12-1: 1-30.

末光愛正

- 1986 「『法華玄賛』と『法華義疏』」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』17: 28-40.

勝呂信静

- 1972 「窺基の法華玄賛における法華経解釈」坂本幸男編『法華経の中国的展開』平楽寺書店: 343-372.

ツルティム・ケサン、小谷信千代

- 1986 『アーラヤ識とマナ識の研究—クンシ・カンテル』文栄堂

寺井良宣

- 1985 「『法華玄賛』における一乗解釋—「理一乗」論を中心として—」『天台学報』28: 187-190.
- 1986a 「中国仏教における法華経解釈の研究—「法華玄賛」を中心に—」『龍

谷大学大学院紀要 文学研究科』7: 119-123.

1987b 「中国の『法華玄賛』末疏について」『天台学報』29: 133-137.

1987 「『法華玄賛』撰述の一側面—『大乘義章』との関係を中心に—」『天台学報』30: 122-125.

中村瑞隆

1972 「西藏訳正法蓮華註と法華玄賛に見られる三草二木喩」坂本幸男編『法華経の中国的展開』平楽寺書店: 695-716.

1976 「チベット比丘パクバの「正法白蓮華」の釈義について他の誤解を破斥する」について野村耀昌編『法華経信仰の諸形態』平楽寺書店: 199-226.

野沢静証

1951 「西藏訳「解深密経疏」(分別瑜伽品)に就いて」『大谷大学研究年報』4: 253-306.

則武海源

2003 「藏文法華註 Dam pa'i chos punda ri ka'i 'grel pa の基礎的研究」『法華文化研究』29: 29-39.

林香奈

2007 「基撰とされる諸経疏の成立過程について」『東洋大学大学院紀要』44:

2011 『慈恩大師基の浄土思想—仏身論・仏土論を中心に—』東洋大学学位論文

2012 「基に関する伝記的記述の変遷について」『東アジア仏教研究』10: 71-86.

布施浩岳

1937 「妙法蓮華経玄賛解題」『国訳一切経経疏部第四巻』大東出版社

前川健一

2002 「円珍『法華論記』の法華思想—「釈序品」に於ける『法華玄義』批判を中心の一」『東洋哲学研究所紀要』18: 3-21.

2004 「円珍『法華論記』の法華思想(二)—「釈方便品」に於ける『法華玄義』批判(一)—」『東洋哲学研究所紀要』20: 83-96.

2005 「円珍『法華論記』の法華思想(三)—「釈方便品」に於ける『法華玄義』批判(二)—」『東洋哲学研究所紀要』21: 41-53.

望月海慧

2006 「ツォンカパの『法華経』理解について」望月海淑編『法華経と大乘経典の研究』山喜房佛書林: 233-259.

2007 「ガムポパの『ラムリム・テルゲン』に引用される『法華経』について」『法華文化研究』33: 19-29.

2013a 「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39: 1-15.

2013b 「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13: 1-22.

2014a 「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『松村壽巖先生古稀記念論文集 日蓮教学教団史の諸問題』, 山喜房佛書林: 41-51.

2014b 「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』6: 7-22.

2014c 「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』14: 1-18.

2014d 「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳『身延論叢』19: 35-58.

2015a 「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喻品」和訳『身延論叢』20: 1-54.

2015b 「チベット語訳『妙法蓮華註』「藥草喻品」和訳『身延山大学東洋文化研究所報』19: (forthcoming).

山口益

1970 「チベット仏典における法華經—法華玄賛のチベット訳本について—」
金倉圓照編『法華經の成立と展開』平楽寺書店: 675-693.

吉川忠夫、船山徹訳

2010 『高僧伝(三)』岩波書店

芳村修基

1970 「正法白蓮華經のチベット語訳とその展開」金倉圓照編『法華經の成立と展開』平楽寺書店: 251-271.

吉村誠

1999 「唐初期における五姓各別説について—円測と基の議論を中心に」『日本佛教学会年報』65: 179-196.

2001 「唯識学派における「一乗」の解釈について—円測と基の議論を中心に」『印度学仏教学研究』50-1: 152-155.

2013 『中国唯識思想史研究 玄奘と唯識学派』大蔵出版

渡辺瑞巖

1938 「藏文法華經註釈について」『大崎学報』92: 217-232.

Abstract

**The factors to make the
Miao-fa-lian-hua-jing Xuan-zan
abridged in its Tibetan translation**

Kaie MOCHIZUKI

Professor / Minobusan University, Japan

In the commentaries on the scriptures (*mDo 'grel*) in the Tibetan Tangyur, we can find two works that were translated from Chinese into Tibetan: the '*Phags pa dGongs pa zab mo nges par 'grel pa'i mdo rgya cher 'grel pa* of Wen tshegs and the *Dam pa'i chos puṇḍa rī ka'i 'grel pa* of Sa'i rtsa lag. The former is a commentary on the *Samdhinirmocanasūtra* of Woncheuk (圓測) (613-696), who came from Korea, and the latter is a commentary on the *Lotus Sutra* of Kuei-Chi (基) (632-682). Though both of them belong to the Chinese Fa-hsiang School (法相宗), their views on the teaching of mind-only are different, and the former is said to be criticized by successors of the latter. In this paper, I take up the latter to consider some problems

in this Tibetan translation of a Chinese text.

The *Dam pa'i chos punḍa rī ka'i 'grel pa* is said to be an abridged translation of the *Miao-fa-lian-hua-jing Xuan-zan* (妙法蓮華經玄贊) and comes to an abrupt end in the eleventh Chapter. Comparing this Tibetan translation with its Chinese text, we can find the reasons it became a shorter version of the Chinese original: (1) the differences in chapters between the Chinese translation of the *Lotus Sutra* and its Tibetan translation; for example, the lack of the chapter on Devadatta in the Tibetan translation or the position of the chapter on Transmission; (2) differences in the passages of the Tibetan translation of the *Lotus Sutra* from its Chinese translation; for example, numbers of verses or added verses in the Chinese translation; (3) Buddhist texts unknown in Tibet, namely the *Ta-chih-tu-lun* (大智度論), the *Shih-erh-men-lun* (十二門論), the *Shih-chu-p'i-p'o-sha-lun* (十住毘婆沙論), etc.; (4) etymological explanations in the Chinese; for example, the title of the scripture; and (5) information known only in the Chinese tradition; for example, the differences between two Chinese translations, transmission of the scripture to China, or non-Buddhist works written in China.

The Tibetan translator consulted the Tibetan translation of the *Lotus Sutra* by Surendrabodhi and Ye shes sde, not the Chinese translation by Kumārajīva that Kuei-Chi depends on, when he translated citations of the scripture. This obviously led to the above-mentioned factors. Therefore, he obviously acknowledged the differences between the two translations, and revised the citations from the scripture in consultation with its Tibetan translation. Thus, it seems that the

abridgements occurred when he could not solve the problems stemming from these differences.

Key Word : Kuei-Chi, *Miao-fa-lian-hua-jing Xuan-zan*, *Dam pa'i chos punḍa rī ka'i 'grel pa*, Commentary on the Lotus Sutra, Tibetan translations from Chinese Buddhist Texts

2015년 6월 15일 투고

2015년 6월 21일 심사완료

2015년 6월 22일 게재확정

